



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	21世紀の教育スタイルと授業研究(fulltext)
Author(s)	山崎,謙介
Citation	研究紀要/東京学芸大学附属竹早中学校(48): 1-1
Issue Date	2010-05
URL	http://hdl.handle.net/2309/109370
Publisher	
Rights	

21 世紀の教育スタイルと授業研究

学校長 山崎 謙介

去る 1 月 30 日、学芸大学では「教育フォーラム 2010～21 世紀の授業を考える～」と題したフォーラムが開かれた。提言として本学客員教授で元杉並区立和田中学校の校長、藤原和博氏による講演「成熟社会に求められる学びの転換～正解主義から修正主義へ」が行われた。時代を見据え、見識に満ちた内容であったことを記憶している。20 世紀が成長社会であったとすれば、そこに求められていた学力は TIMSS* 型学力であり、「正解」を導き出すチカラ、単純計算が速く、短絡的な思考が有利とされる学力である。その結果、就職しても、この会社は「正解」ではない、この仕事は合わないから辞める、といった発想に陥るといふ。一方において 21 世紀は正解主義に対して「修正主義」が重要であるといふ。20 世紀に求められた情報処理力に対して「情報編集力」が重要であり、学力としては PISA** 型が求められる。

知識を実社会で応用するためのリテラシー、「納得解」を導き出すチカラ、違う見方もあるかもしれないという複眼思考が重用になってくる。その結果、会社に就職して困難な事態に遭遇しても、この会社で「納得解」にならないか、この仕事を工夫して面白くできないか、という発想、このような「修正主義」の考え方が 21 世紀成熟社会にとっては重要になってくるということが話の結びであった。

上記のような社会の変化に対して学校教育は十分に対応できるであろうか。「伝統」を重んじることも必要であるが、時代の変化にも目を向けなければ 21 世紀に生きぬくチカラを備えた人間を育むことはできなくなるであろう。本校も徐々にではあるが PISA 型学力の育成を意識した授業が見え始めている。本校でも当然のことながら、「授業研究」を通して教育の絶えざる向上が図られている。実は、この「授業研究」というシステムはわが国独自のシステムとしてあり、“jugyo kenkyu”として各国から注目されていることを教員諸氏にご存知であろうか。海外では教員の研修は外部で行われるのが常である。わが国のように教員が自身の努力によって自己研鑽を積むという伝統は誇りに思ったい。本紀要（論文集）は、この「授業研究」の記録であり、成果といったい。みずからの励みとしたい。

* TIMSS(Trends in International Mathematics and Science Study) : 国際教育到達度評価学会 (IEA) によって実施される『国際数学・理科教育動向調査』

** PISA(Programme for International Student Assessment) : OECD 生徒の学習到達度調査